

立山展望台「室堂」の賑わい



計測と科学
毎週日曜日発行
日本計量新報社

〒920-0801 富山県富山市
富山駅前1-1-1
T. 076-233-2222
F. 076-233-2223
E. jnm@jnm.co.jp
http://www.jnm.co.jp

第1部

計量記者
日本を撮る

冬は縮こまります。日帰りの温泉にでかけて千円ほどを使って体をあたたためてのんびりするのもいいでしょう。日が長くなる4月から9月までは1日の行楽の時間に余裕ができます。5月の連休は皆元気にあちこちと出かけるようです。ビジネスホテルを使っての旅行は予約なしで出かけられる上、地方を回ると1泊六千円ほどと安くいいですね。日本の天空の別天地は立山・剣岳などがぐるりと取り巻く大高原の室堂です。5月の連休には富山側からのルートは「雪の大谷」という名物がありますので美女平からバスを使って室堂に行きます。もちろん長野側の大町ルートは東京方面の人には便利ですし、ケーブルカーとロープウェイを使って黒四ダムを見ながら室堂に行くのも悪くはありませんし、室堂から直ぐの雪の大谷を歩いて見物することもできます。バスやケーブルカーで真白き世界の室堂に運ばれて北アルプスのまっただ中に突如として放り出された人々は興奮し歓喜のひとつきを過ごすのです。白い世界の色とりどりの衣服をまとう人があふれます。一番の極色彩は登山者です。春の剣登山、立山登山に真剣に取り組むアルピニストも室堂からのアプローチになるからです。こうした人々がごった返す賑やかな室堂は観光に飢えていたかつての日本を彷彿させて懐かしさを思い出させます。この地にはアジアの国からの観光ツアーが目立ちます。室堂に出かけたらこの地に1日宿泊滞在するといいいでしょう。少し下った弥陀ヶ原には富山県が運営する国民宿舎がありますし、室堂には幾つかホテルがあります。東京、名古屋、大阪などから2泊3日、3泊4日の日程で室堂など周辺の観光地に出かけることができます。写真は四月末の室堂でのスナップです。(写真と文章は横田俊英)

2007年 謹賀新年

早苗時期の白川郷



日本計量新報

計測と科学
毎週日曜日発行
日本計量新報社

〒990-0001 福島県須賀川市
須賀川 1-1-1
TEL 0246-22-1111
FAX 0246-22-1112
E-MAIL jpnshinpo@nifty.com
http://www.jpnshinpo.com

第2部

計量記者
日本を撮る

白川郷を訪れたのは5月26日であった。桜はおわっていて富士の紫の花とあぜ道の芝桜の桃色が目にはいった。白川郷はこのころが田植えで、合掌造りの旧家の窓からその風景が見えた。薄曇りのこの日は囲炉裏の火がちょうど良い季候で、もてなしの茶を飲みながら昔の暮らしぶりの話のなかに農家の次男坊三男坊の生き方のことが出て、田分けされることのない人々は寺の作男などになるのだということだった。芭蕉の奥の細道の旅たちの句は「行く春や鳥啼き魚の目は涙」であり、3月27日深川の芭蕉庵を出立した。福島県須賀川に達して「風流の初やおくの田植えうた」、さらに福島市の信夫の里にやってきて「早苗とる手もとや昔しのふ摺」と心をつづる。須賀川の地には余所の地と同様にファンのもてなしで四、五日留められ、ここまでの旅でも「心疲れ、かつ風景に魂奪われ」と須賀川での記録を残している。田植えの時期の気候は人の体を冬の縮こまりから解放する。このころには卯の白い花が咲き、田植え行われ早苗が広がり、新緑がいっばいに広がるのである。田植えのころは日本の良い季節である。新緑が広がるとすべてが生き生きとする。芭蕉が述べているように風景には人の魂を奪うものがある。寂しい、悲しいといった心の疲れは旅に出ると増長されることもあるが、また旅でこうした心はいやされもする。島崎藤村は、暮行けば草笛の歌が悲しく聞こえるようであり心の濁りと同じような濁り酒を飲んで旅の疲れを慰めるのだと「千曲川旅情の歌」にしている。藤村の生まれた馬籠は長野県から岐阜県に移って世間をあっといわせたが白川郷はその岐阜県にある。一人旅をしていて心浮かれることはまれである。芭蕉は曾良を途中まで伴った。藤村の歌は一人旅の心情をよく現している。寂しさと向き合うのが旅であるようだが人は何故かその旅に出たがる。写真は田植え時期の白川郷。(写真と文章は旅行家 甲斐鐵太郎)

2007年 謹賀新年